

雑報

553.94 : 550.822.1 (521.15) : 622.19

山形県最上炭田名木沢試錐結果

山形県北村山郡・最上郡にまたがる最上炭田の地質調査の結果にもとづいて、北村山郡福原村名木沢地内の最上川大彎曲部の台地に深度 150 m の試錐を行い、徳永がその位置の選定及びコア調査に、工事は、本所試錐課の監督のもとに福沢炭鉱が当つた。

工事は昭和 25 年 7 月 8 日から 10 月 7 日迄約 3 ヶ月間行われ、R300 型試錐機を用い、初孔径 100 mm、終孔径 65 mm、コア採取率は 31% であつた。

試錐工事現場は台地上の濕原であるため用水に便であるが、電力設備がまだないため、原動機には 10 馬力の石油発動機を用いた。

試錐施行位置は、奥羽線芦沢駅から西方約 2.2 km、福沢炭鉱（鉱業権者永井寅松）の鉱区に属し、標高 116.7 m 三角点の S84°W の方向、3 角点から直距離 880 m の地点である。附近は標高 60m の河成段丘が広く発達し、河岸に僅か点々と夾炭層が露出している。

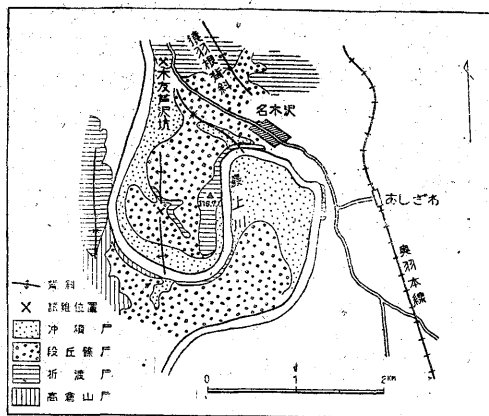
最上炭田中心部を南北に走る猿羽根背斜軸は、この地域の北方で東に曲りながら南に沈みその西翼に当る最上川岸では、木友三尺及び四尺の 2 炭層を、木友芦沢坑で稼行している。

試錐を行つた地域はその南に当るが、これら炭層の連続が確認できず、又現在 116.7 m 三角点の東側で稼行している東亜・西野・大山等の諸炭層の炭層が、上記炭層のいつれに当るかが採炭上の問題となつていた。最上川西

不良のため不明確であつた。

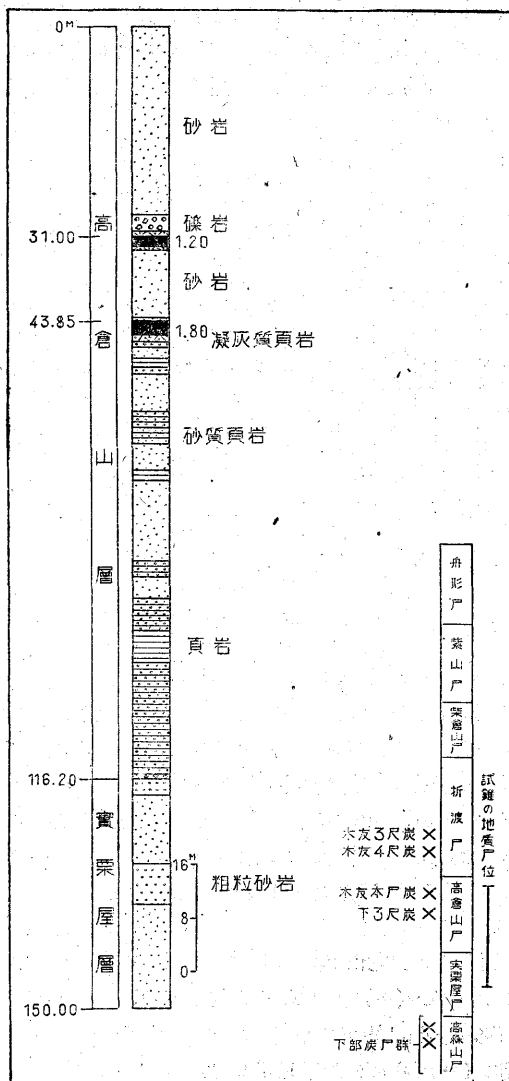
以上の理由と共に、この地域には猿羽根背斜の南西に派生した小ドーム構造が伏在し、上記 2 炭層よりも更に下位の所謂木友本層、（最上炭田における炭層中の最厚層）の存在が推定されるに至つたので、試錐を行うことになつた。

未知炭層の確認と地質層序の関係を明かにするため行われたこの試錐は、深度 31 m で、厚さ 1.2 m の炭層を、



第 1 図 試錐位置図

岸一帯の地質層序は、既に地表地質調査済で明かとなつているが、尾花沢・芦沢方面の地質層序との関係は、この地域が広く河成段丘に被われて夾炭第三紀層の露出が



第 2 図 試錐地質柱状図

深度 43.85 m で厚さ 1.8 m の炭層に当り、層序上これらは、不友本層と下三尺炭層であることが確認できた。

試錐のコアによれば、地質は第 2 図のように主としてくづれやすい砂と凝灰質頁岩の互層であり、地表には厚さ 3 m の段丘円礫層が分布し、炭層より上位の互層は砂勝ちで、炭層の上下盤は、凝灰質頁岩である。深度 60~110 m 附近は泥岩質となり、更に深部は砂質となる。大部分は最上岩田上部夾炭層の中部に当る高倉山層^{みくりや}で、深度 116 m 以下は、主に石英質粗粒砂からなり、実栗屋層(粗鬆砂岩層)に属する。

炭質は木質部の多い亜炭であるが、上部夾炭層中のものとしては、質が硬く良質である。下位の炭層には厚さ

1 cm の褐色凝灰質頁岩の夾みがあり、その傾斜角度は 2° 内外と考えられるので、試錐コアの炭層は眞の層厚に近い値を示すものと認めてよい。傾斜 2° とすれば、上位炭層の厚さは 1.18 m、下位炭層の厚さは 1.78 m となる。

従来最上郡舟形村周辺以南には、地質構造上木友本層の存在が確認されていなかったが、この地域で採行出来る深度にその存在が認められた結果、確定埋藏炭量も相当増加し、附近炭鉱はその開発に着手した。(徳永重元)

これは地表地質調査の基礎の上に、試錐位置を選定して成功を収めた 1 例である。(竹原)

553.625 : 550.8 (522.6)

大分県玖珠郡野上村珪藻土調査報告

要約

1. 珪藻土は大分県玖珠郡野上村一帯に分布する。
2. 珪藻土層は第四紀に堆積した湖成層である。
3. 第四紀層の厚さは最厚 120m で殆んど水平に分布し、下盤は不明であるが、上は阿蘇熔岩或は安山岩に被覆されている。

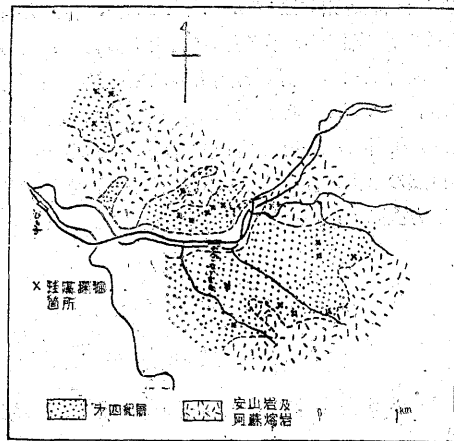
珪藻土は、多くの層準に分布しており、莫大な量がある。

4. 採掘条件が良好な地域が現在数個の会社により採行されている。

5. 珪藻は円形の *Cyclotella* (*Stephanodiscus*?) が主で、他に *Fpithemia Melonina* が認められる。

6. 本所分析試験課の分析結果は SiO₂ 82~87% である。

7. 会社には夫々附属工場があり、乾燥粉末にして、断熱保温材として豊後中村駅より発送される。



第 1 図 大分県玖珠郡野上村附近地質略図

8. 生産の最大の隘路は乾燥である。(昭和 24 年 3 月調査 浜地忠男・岡田健次・原田種成)

553.611.6 : 550.8 (521.81) 622.1

鳥取県神戸村ペントナ

神戸村一帯は石英粗面岩の逆出に伴う同質の角礫凝灰岩の地帯である。この角礫凝灰岩が第三紀末の温泉作用に依る熱水変化を受けたのが、神戸ペントナイトの成因である。その熱水変化の区域は相当広範囲に及ぶもの様であるが、踏査の範囲では上砂見・大湯棚を中心とした東西 1.5 km、南北 1 km の 150 万 m² に及んでいる。その中で企業の対象となりうるペントの埋藏量は 180 万

t 位であろう。その品位性質については、なお今後の試験の結果をまたなければならぬが、吸着性の強いことと膠状微粉性は蓋し山形県・新潟県産の一級品に互するものと考えてよからう。比較的運搬の便利な位置にあり、採掘の容易なこととは、企業の点に非常に有利であり、大量生産も可能であると考えられる。(昭和 24 年 8 月調査 加藤信・甲藤次郎)

553.3 : 550.8 (523.5) : 622.1

高知県安藝鉱山鉄・マンガン鉱床概況

昭和25年5月当地方の炉材珪石調査の際半日間当鉱床を概査した。

〔鉱区番号〕 試登第 2,102号。

〔鉱業権者〕 佐渡島英禰他2(大阪市東区安堂寺橋通3の6)

〔位置〕 安藝郡井の口村宮の上を中心として、その東山両山腹の地域。

〔地質及び鉱床〕 附近一帯は安藝川層の頁岩が多い。一般走向N60°~70°E、概して北に急傾斜する。鉱床は主として同層中の含鉄チャート中に胚胎し、時にはチャ

ートに接する頁岩、砂岩中にも存する。形態はチャートの走向方向と長径の方向を同じくするレンズ状のものが多い。その長径の大きさは時には数十mに達するものもある。

〔見込品位〕 Fe%+Mn% 30%前後。一般に品位は低いが、鉱体中の変化は少い。

〔備考〕 終戦後休山、残存鉱量比較的大。故に、低品位鉱でも処理される時期には、考慮の余地あるものと認める。(菊池徹)

06 (521.25) : 622.001.5 : 061.2/.3

第一回鉱業技術会議秩父鉱山現地研究会

日本鉱業会・日本鉱業協会主催の第一回鉱業技術会議の秩父鉱山現地研究会は Dr. B. M. Page, 西脇親雄氏等の指導の下に昭和25年7月28日より8月8日まで行われ、参加者総数30名。当所よりは菊池徹・高島清が参加した。Dr. Pageの云われる調査方法は、一口にして云えば、野外(坑内をも含む)に於て、あらゆる手段に依り自然の事実を極めて注意深く丁寧に観察し、それを適正な方法にて、極めて正確に図面化する事である。

而してその図面に依り総合的にいくつかの性質をみまびき、鉱床の胚胎状態を推定しようとするものである。

これらの調査方法は我々にとって必ずしも新しいものではなかつたし、今までもこの様な方法でやれば良いと云う事も知っていた。然しそれを自から本当にやつて見て、自分で非常に良い方法であると云う確信がついた。

なお地質学的の研究結果は資料として保存してある。

(菊池徹)

553.661.2 : 550.8(523.5) : 622.

高知県清水鉱山含銅硫化鉄鉱床概況

昭和25年5月当地方炉材珪石調査の際1日当鉱床を概査した。

1. 鉱区番号 試登 2492号。

2. 鉱業権者 北村健彦他1。(高知市東唐人町28)。

3. 位置安藝郡東川村宇清水きよみずにあり、安藝町から東北方約4km。交通便。

4. 地質及び鉱床 安藝川層の頁岩中に胚胎する含銅硫化鉄鉱床であり、数個の小鉱体(大きなもので長径

20m)の集合である。型態はレンズ状又は塊状をなすが、それ等の長径は垂直に近い角度を有して立つているものが多い。

5. 見込品位 相当高い様、平均精鉱品位はCu 6%、S 40%前後。

6. その他、目下休山中。既知鉱体の殆んどを採掘しつくしている様で残存鉱量は少い。なお今後適当な方法で探鉱を行う必要がある。(菊池徹)

553.44 : 550.8 (521.44) : 622.1

中龍鉱山調査報告

昭和23年7月及び11月に福井県大野郡下穴馬村中龍鉱山を調査せる報告書である。内容目次は1緒言、2総括、3人形断層附近、4南仙翁鉱床、他附図4葉。本調査の目的は人形断層の性質に依つて人形中山鉱床の

探鉱方針を決定する事を主とした事と、南仙翁鉱床の地表調査を主としたものである。なお本調査の基礎的方面は京大田久保教授、鶴飼助教授が行われ、その報告も併せ記してある。結論としては人形断層は本山鉱床を二つに

切断し、人形鉱床と中山鉱床に区分する。この断層は水平移動 200m 落差最大 400m位。なお本報告は次年度に

553.32:550.8 (521.53):622.1

岐阜県試登 4723 号 鉱区 マンガン 鉱床 調査報告

昭和 23 年 5 月に岐阜県可児郡錦津村のマンガン 鉱区の概査報告である。鉱区附近の地質は角岩・砂岩・粘板岩の互層からなる古生層と第三紀角礫岩層から構成されている。マンガン 鉱床は古生層の角岩中に胚胎せられて

553.43:550.8 (521.85):622.1

福 重 鉱 山 調 査 報 告

昭和 23 年 2 月山口県美禰郡於福村大嶺町の福重 鉱山(銅)を地質調査及び物理探鉱を行った結果報告である。鉱床は石灰岩及びホルンフェルス中に胚胎し、英雲閃緑岩を運鉱岩とする高熱交代鉱床である。鉱床は磁鉄鉱を主とし、銅の二次富化帯を伴う。銅鉱の粗鉱品位は平均 7.4%。地質的に新鉱床の発見可能と考え、磁気探鉱及び

553.982:550.8 (521.28)

千葉県安房郡吉尾村八丁の石油徴候

I 位置及び交通

安房鴨川町西方 8 km; 佐貫—安房鴨川バスにより吉尾村入幡下車、嶺岡牧場行道路に沿い南下 約 2,500 m。

II. 地質及び石油徴候

嶺岡牧場行道路はその分岐点 (1/50,000 地形図安房鴨川図幅西北隅、吉尾村板屋部落東方 300 m) より南方 約 1,500 m の地点に道路沿小切割を有するが、これより南方 300 m の間道路東側には相当硬い中粒砂岩層が露出し、走向 N50°E、傾斜 N 50° を示し、裂隙に富み、塊状、且つ方解石の網状細脈により貫かれている。これより南方道路沿約 200 m の東側山脚切り取りに黒色頁岩層が露出する。又その道路西側は貯水池の堤となつている。

(1) 上記堤東側崖に露出する黒色頁岩は滑り面を有する 1 辺 3~5 cm の細片に破碎し、黒色光沢を有する。こゝでは頁岩の割目から硫質泉の浸出があり、道路側排水溝内に遊離硫黄の白色沈澱が見られる。又破碎塊中には 1 辺 0.1~0.5 mm の黄鉄鉱結晶を含む事があり、又裂隙は白色方解石脈により充填せられる処がある。又径 170 cm に達する龜甲状泥灰岩団球を埋める部分がある。この黒色頁岩を破碎して水中に投ざると油膜らしいものを生ずる。

調査を継続する予定にて中間報告としたものである。

(浜野一彦 矢崎清貴原著 堀越抄録)

た交代鉱床である。鉱体は 2 個あるが厚さは平均 20 cm。MnO₂ 35~50%。移行対象となり難い。(福井三郎原著 堀越抄録)

自然電位法を実施し、2カ所に著しい異常を認めた。中 1カ所は現在坑道を中心とする区域、他は試錐の将来予定地とした。内容目次 1. 沿革、2. 位置交通、3. 地形、4. 地質、5. 鉱床(型、鉱石、脈石)、6. 鉱床各説、7. 鉱量及び品位、8. 物理探鉱成果、9. 現況、10. 結論及び意見、附図 13 葉。(浜野一彦外 5 名)

(2) 貯水池南端で池に注ぐ溪流に沿つて溯れば溪流の岩壁には破碎されて走向傾斜不明の黒色頁岩が露出し、採つて水中で破碎すると微弱な油膜を生ずる。

(3) 上記溪流に沿い貯水池から 200 m の地点の黒色頁岩は明瞭な油膜を伴う。又同処の砂防堤に接して見られる断層 (N 50°W, 85°SE) の破碎帯では破碎塊中に石油を含み、これを槌打粉砕すると明瞭な石油臭を発し、水中に投ざると鈍色の油膜を生ずる。なお破碎帯は黒色外観を呈している。

(4) この溪流をなお溯ると、時に砂岩の介在を見るが、甚だしく破碎を蒙り走向傾斜不明である。又黒色頁岩は破碎孔隙に石油を包蔵するようで、水中に投ざると微かながら油膜状浮游物を生ずる。

これら油徴を有する黒色頁岩層の厚さは 500 m 以上で、所謂嶺岡層上半部中位に属するものようである。(東京通産局勤務本所燃料部兼務井島信五郎)

本文は井島技官が千葉県に提出した報文に補筆したものである。現在関東地方の石油埋蔵の可能性に就き大方の関心が高まつている折からその一参考資料として提出する。(金原均二)